



「メディカルケア」から「ヘルスケア」へ

2015年は、第一次ベビーブームの時代に生まれた「団塊の世代」の全員が65歳以上になり、高齢者の仲間入りをする年です。さらに、2025年は、団塊の世代が75歳以上の後期高齢者になります。日本の高齢者人口の構成の特徴は、今後、75歳以上の後期高齢者が増え、前期高齢者の人口より多くなることです。

後期高齢者は、加齢による体力や抵抗力の低下が大きく、病気にかかりやすくなります。そのため寝たきりや要介護の高齢者が増加することが予測されています。現在「2025年問題」として、さまざまな施策が検討され、施行されています。

さて、要介護の原因をみますと①脳血管疾患（脳卒中）、②認知症、③加齢による虚弱（フレイル）、④骨・関節疾患、転倒・骨折、です。

要介護の予防には、生活習慣病（高血圧、糖尿病、脂質代謝異常症など）の予防と治療が大切ですが、認知症や「フレイル」も重要です。前期高齢者では、脳卒中が要介護の主な原因ですが、後期高齢者では「フレイル」が主となります。

「フレイル」とは、加齢により全身の臓器の働きが低下して、ちょっとしたストレスにより、要介護となったり、要介護の危険性が高くなる状態をいいます。以前は「虚弱」といいましたが、これは「回復不能

というネガティブな意味合いが強く、回復できることを強調するために、新しい言葉「フレイル」を使うようになりました。

加齢による筋肉量の減少、筋力の低下を「サルコペニア」といいます。「フレイル」との関連が注目されています。また、骨・関節・筋肉などの運動器の働きが衰えると、要介護となる危険性が高くなります。この状態を「ロコモティブ シンドローム」（運動器症候群・ロコモ）といい、「メタボリック シンドローム」（内臓脂肪症候群・メタボ）とも深いかかわりを持っています。

平均寿命と健康寿命との差が、だんだん開いてきています。要介護の期間が延びているのです。介護予防が、急務の課題となっています。介護保険では、「フレイル」対策として、介護予防が施策の重要な柱となっています。高齢者自身の健康づくりと病気予防の「セルフケア」とともに、保健・医療・介護・福祉のそれぞれの立場から高齢者の生活を支える幅広い医療（ヘルスケア）が求められています。高齢者医療の目標は、高齢者のQOL（生命の質・生活の質・人生の質）の向上です。

「治す医療」（メディカルケア）から「治し支える医療」へと大きく変わってきました。（上田 裕）



告知

電子カルテシステム本格稼働



前号（第50号）の記事でも紹介させていただきましたが、2015年3月1日より、当院の電子カルテシステムが稼働しました。

この電子カルテは紙媒体を減らすというだけのもではなく、院内各部の連携をスムーズに、かつ正確に行うためのものです。

また、院内だけの情報共有に留まらず、琵琶湖メディカルネットなどを通じて、連携・提携先の

病院や医院とも情報を共有できます。

（※情報共有には患者様・ご家族様の同意が必要です）この医療機関間の情報共有は、治療に関するタイムラグを最小にするとともに、何度も同じ検査をする必要がなくなるなど、患者様に大きなメリットがあると考えられます。

動き出したばかりの電子カルテですが、これから様々な応用が期待されます。